

韓国研究におけるモノ研究と生活財調査

著者	岡田 浩樹
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	44
ページ	67-79
発行年	2003-12-26
URL	http://doi.org/10.15021/00001855

韓国研究におけるモノ研究と生活財調査

岡田 浩樹

1 はじめに

——『朝鮮多島海旅行覚え書き』におけるモノへの視点

昭和 11 (1936) 年 8 月, アチックミュージアム同人が現在の全羅南道を旅行した。参加メンバーは澁澤敬三, 高橋文太郎, 櫻田勝徳, 磯谷勇, 宮本馨太郎, 小川徹, 村上清文など, アチックミュージアムの中心的な人々であった。現地の事情をよく知っていると言うことで京城帝国大学の秋葉隆も参加している。この踏査の記録は, 後に『朝鮮多島海旅行覚え書き』として発刊されている。

植民地支配期の民俗学者, 人類学者の朝鮮半島における調査・研究活動については近年ようやく研究が始まったところであり, いまだ詳細な検討がおこなわれたとは言い難い。また, 戦前の研究と戦後の人類学, 民俗学間の連続性/不連続性も今後の検討を待たねばならない問題である。ただし『朝鮮半島多島海旅行覚え書き』には, 戦後の日本人人類学者の民族誌にはないある特徴が見受けられる。

それはスケッチの多さである。『朝鮮半島多島海旅行覚え書き』の前半は「巡行記」という調査日誌となっている。そこには 38 枚の写真と図 1 枚が収められている。後半は「見聞記」としてフィールドノートの覚え書きとなっている。ここには 21 枚のスケッチが図として収められている。そのスケッチの大半がいわゆる民具や家屋を描写したものである。

言語ができない状況で, しかもわずか 3 日間の踏査でかくも多くの分量のフィールドノートをとったことが驚きである。ただ, やはり言葉を介さない調査では通訳を用いても「観察」とそれに基づく記録が主になったことは十分理解できる。

しかしながら, この特徴には, 単なる調査技術上だけではない問題もあるように思われる。つまり日本の民俗学における「民具研究」の視点, あるいはモノへの視点がこの時期の調査に大きく影響していた。『覚え書き』では, それぞれの集落についておおまかな項目にフィールドデータを分類して記述してある。その項目の数例を挙げると以下のようなものである。

「部落所見」, 「民家」, 「民具」, 「服飾」, 「労働」, 「信仰」, 「雑」(全羅南道務安郡倭子面鎮里)

「部落所見」, 「服飾」, 「民具」, 「祖霊祭」, 「俗信」(全羅南道務安郡倭子面水島里)

「部落」, 「服飾」, 「民具」, 「農業」, 「漁業」, 「信仰」, 「雑」(全羅南道靈光郡月面上洛月里)

集落ごとに異なる項目はあるものの、「服飾」「民具」はほぼ全ての集落に共通する項目となっている¹⁾。さらに言えば、労働や信仰の項目においても、農具や漁具、儀礼用具などのモノに関する記述も今日の民族誌と比較すると多いと言えよう。

こうした朝鮮のモノに関する関心の大きさは、植民地期の日本人研究者に共通する傾向とまで言えるかもしれない。朝鮮の「俗信」に関心を寄せた村山智順、「巫俗」研究に集中した秋葉隆、赤松智城なども、多くのモノの写真、スケッチ、モノについての記述や論文を残した。このような生活全般にモノも含めた関心を抱く視点は民俗学、人類学だけでなく、今和治郎などの考現学的なアプローチや、広くは民芸運動なども、当時の朝鮮のモノについての関心を反映していると言えるだろう。

彼らの研究は、もちろん現在の民族誌的研究の水準から見れば不十分な点もあり、植民地主義的バイアスが入り込んでいることはしばしば指摘されていることは事実である。朝鮮（韓国）のモノへの関心はエキゾチックな文物への関心であり、ある種のオリエンタリズムと親和性があることは事実である。しかしながら当時の研究者がもっていた朝鮮（韓国）モノへの視点は、物質文化（モノ）も含めた生活全般の理解という視点の萌芽であった可能性もある。戦後の人類学的研究の展開において、この視点はどのようになっていったのであろうか。そして今日、彼らのモノへの視点から学ぶべき点はないのであろうか。

2 戦後の韓国研究におけるモノへの関心の弱化

端的に言えば、戦後の日本における韓国社会に関する人類学的研究は、むしろモノについての関心を失っていたと言えるのかもしれない。例えば、日本で発表された戦後から1990年までの人類学的（民俗学含む）研究の論文628件中、物質文化そのものを主題にした論文はわずか18件にとどまっている²⁾。

全体の研究の傾向として、戦後の人類学的研究はもっぱら家族・親族関係を中心に社会構造の理解に集中してきた。一方、民俗学はシャーマニズムを中心とした民間信仰、そして「韓国の基層文化」「韓国人の心性」に関心を寄せてきたと言えるであろう。この結果として、韓国社会への人類学的アプローチとして物質文化研究（モノ研究の視点）が戦前と比較すると少ないように見受けられる。

この背景には、物質的文化を中心的に取り扱う他の分野の存在もある。例えば今和治郎の民家研究は戦後はもっぱら建築学の分野で進展した。あるいは衣服に関しても被服学の分野で韓国の衣服に関する研究を担っている。韓国の民具研究は民芸運動の流れをくみつつ、研究者とは異なる立場から民芸品愛好者の中に受け継がれている。ある意味で研究分野の分業化・細分化の結果、人類学・民俗学が韓国の物質文化（モノ）を取り扱わなくなったという見方もできる。

しかしながら、近年さまざまな批判があるにせよ、人類学における全体的アプローチの観点から見る場合、他社会の研究と比較しても韓国研究における物質文化（モノ）研究が少ないことは指摘できるであろう。社会関係、集団を律する規範、社会構造に関心を集中させていった場合、どうしても具体的なモノ自体よりも社会的・文化的機能、意味が重視されてしまう。戦前の研究においても、社会集団に研究対象を集中した鈴木栄太郎が物質文化にほとんど関心を寄せなかったことは示唆的である。一方、民俗学や他の分野においては物質文化（モノ）を取り扱っていても、分類や地域性、他社会との比較に主要な関心があり、物質文化と社会との関係、生活の中でのモノと人間との関係は等閑視されてきた。

物質文化（モノ）に対する関心が弱化したことが、韓国社会の人類学的研究にいかなる問題をもたらしたかは慎重に検討すべき問題であるが、ここでは以下の特徴を指摘することができるであろう。まず、民族誌的記述において、モノはあくまでも、社会関係、儀礼などのコンテキストで説明される傾向がある。しかもモノが重要な位置を占める「生活」ではなく、親族制度、儀礼、社会関係など全体的な文化（社会）のコンテキストで説明される傾向がある。この背景に社会的機能、シンボル・表象への注目など、社会（文化）が一方的にモノを意味づけるという暗黙の了解が研究者の間にあると言えよう。言い過ぎを恐れないならば、韓国社会、文化にアプローチする場合、物質文化に対して精神性、観念性が優位にあるという前提があるかのようなのである。

このような特徴は、決して全面否定されるべきものではないことは当然である。しかしながら、物質文化（モノ）に着目することで得られる興味深い問題をこれまで見のがしてきたように思われる。モノそれ自体が産み出す意味、現象への注目、モノ同士の関係が産み出す関係、現象への注目が欠如している。

全体的に見て、戦後から1990年代までの人類学的研究においては、韓国社会や文化を捉えようと試みてきた。これは「伝統的韓国社会」の理解には一定の成果を挙げてきたと評価できよう。しかし戦後の韓国社会は社会、文化さらにはライフスタイルも含む生活全般が大きな変化を被ってきた。そこでフィールドワークをおこなう場合の方法論上の問題が十分に議論されてきたとは言い難い。そしてモノ（物質文化）への関心が弱化したため、彼らが把握した社会、文化の「伝統的」モデルとフィールドワークで目のあたりにする現実の生活とその変化の間にある種の齟齬が生じていた可能性もある。すなわち具体的なモノがその重要な一部として構成される現実の生活は、この時期の変化の大きさのゆえにただちに社会的機能、意味、表象に還元することはできない。

1990年代以降、韓国社会はさらに大きな変貌を遂げつつある。高度成長期が一応の段階に達し、産業化、都市化によって韓国人のライフスタイルが「李さん一家」のような都市生活者（集合住宅をはじめとする）に移行し、近年ではインターネット、携帯電話などコミュニケーションの領域における変化が大きい。いわば韓国社会が完全に「伝統

社会」から高度消費社会に移行し、韓国人のライフスタイルも大きな変化をしている。その暫定的な時期区分として1990年が一応を設定できるのではないかと。

1990年代以降の韓国研究の特徴は、急激にその数が増加するだけでなく、分野を越えた研究が多くなり、特定分野と関連がつけにくいことである。しかし人類学的研究に限定すると、1990年代までの傾向は現在にいたるまで継続しているのではないかという仮説が成り立つ。

3 韓国社会と人類学的アプローチ、「モノ」研究

「韓国社会の特質」としてモノや生活への関心の薄さがしばしば指摘されることは事実である。住み慣れた家屋敷から都市のマンションへ何のためらいもなく移動し、さらには頻繁にそのマンションも引越しを繰り返すこと、日本の村落と比較し、韓国の村落には保存、維持されている文書やモノが圧倒的に少ないこと、新製品に対する韓国人の関心の高さ、などさまざまなエピソードが語られる。同時に韓国社会のエートスとして物質に対する精神性の優位が強調されるという見方もある。

しかし物質文化への関心の薄さが韓国社会のエートスなのかは慎重に検討すべき問題である。研究者の側の方法論的、認識論的な問題も考慮に入れる必要がある。韓国研究の問題にとどまらず、文化の理解をめぐる人類学的アプローチの問題点が内包されている可能性も否定できない。これは稿をあらためて論ずるべき大きな問題であり、ここでは以下の2点を指摘するにとどめたい。

第一に、韓国研究において「文化」が自明とされ、文化概念の内包する含意と問題点が議論されてこなかった点である。

近代の人類学的研究の人類学的視点における文化の観念的側面および慣習への集中と物質文化研究の視点への弱化と表裏一体の関係にある。一般的に「文化」とは、それを最広義に定義すると、人間行為（ならびにその所産）の蓄積全体のうち、遺伝的ではなく社会的に伝達される部分のことを指すとされる。このような文化の定義の淵源はタイラーの『原始文化』（1871）の定義を修正したものである。かつての文化の研究において中心概念は「慣習」、すなわち伝統的・規則的な物事の行い方という概念であった。それぞれの文化の特徴に言及する際に、あくまでも慣習およびその背後にある「社会関係」「構造」「体系」などといった観念的側面やモデルが強調されてきたと言えよう。

欧米の人類学を「輸入」してきた日本の人類学者たちは結果として物質文化研究を見届けてきた。また、ひとつの単位としての韓国文化・社会に関する全体論的アプローチは「民族」の問題と連動しながら強化され、結果的にモノ（物質）が直接関わる「生活」の問題を議論してこなかった傾向がある。

第二に、特に物質文化をとり扱う場合の「個別文化」、この場合は「韓国文化」という

複合概念の内包する含意と問題点を議論してこなかった点である。

モノ（物質文化）を取り扱う場合、「韓国の・・・」というアプローチがある。これは、まずひとつの統一性をもつ韓国文化を前提とし、その特性を他と比較する方法である。しかし、そこには個別の「ひとつの文化（a culture）」と、普遍的な「文化（Culture）」という二重の基準がある。この結果、モノはその具体的文脈を考慮しているようで、その特性を指摘するときには普遍的基準によって同定する。例えば、文化項目（culture item）の視点であるが、そこにおいて食文化、住文化という対象化はいかにも曖昧である。

そして人類の一属性としての文化一般（Culture）と一般に特定の間人集団に独特の生活様式と考えられている個別の文化（a culture）は区別される必要がある。後者は文化への特性論的アプローチと言え、そこには「文化領域」（culture area）という先入観が内包されている。この文化領域のアプローチは、文化の諸特性に高度の一貫性（文化体系）が見られ、しかも近接領域との違いがはっきりと認められるような地理的領域を区画しようという試みにつながる。

韓国社会のようなきわめて民族的には均質な「単一民族国家」を取り扱う場合、この二つの文化の区分がより見えにくく、個別のモノに過度に高度の一貫性を見いだしてしまうか、もしくは一貫性に適合しない場合そのモノを排除してしまう危険性がある。

このアプローチの問題は現代社会を取り扱うときに顕在化する。標準化された大量消費財が生活財の大半を占める状況において、もはや「韓国的なモノ」は韓国人の生活の中に少なくなってきた。それらの大量消費財を通して韓国社会の特性、高度の一貫性をみるなど不可能である。

4 おわりに

——李さん一家の展示が提起した問題とモノ研究の可能性

筆者は、産業化・都市化さらには globalization という状況に際し、家族・親族研究を中心とした社会構造研究や、シャーマニズム研究に焦点をあて、「韓国の基層文化」を解明しようと言う「伝統的な」手法にはもはや有効性は少ないと考えている。しかし人類学的な研究が「伝統社会」の解明に向けられ、歴史学の一分野として存続せざるを得ないとは考えない。国立民族学博物館の特別展示は、現在の韓国社会に対する人類学的研究の可能性を提示していたように思える。3000点という多くのモノを現実の韓国の家族が所有していたことは、事実として出発すべきである。このようなモノたちに取り囲まれた韓国の家族（チブ）の姿は従来の韓国の家族（チブ）研究では描かれることがなかったものである。

この事実から出発する時に、様々な問題が設定可能である。例えば展示されていた多量の大量消費財と個別の家族の関係という「アンバランス」な関係は、例えば、商品、

商品化、差異化、物象化と具体的なモノ（現象）の関係をどのように考えるかの問題を提起する。また個々のモノのエピソード（個人史、歴史、逸話）を語ることの有効性と、それらのモノから社会や文化の全体をとらえるかという問題もある。その背後には前節で指摘したような一般的な問題も横たわっている。モノをとらえるためにどのような概念装置、方法論、認識論が必要なのであろうかという問題である。

これまでのところ、日本の人類学者の反応は興味深いものの、やや冷ややかな態度であるように見受けられる。それはかつて考現学などの手法が、社会の一断面を指摘するにとどまる「おもしろい」研究以上の評価を受けなかったことと共通しており、「生活実態調査」という方法も、いまだ個別の問題意識にとどまっているという限界があるためであろう。

しかし近年の Cultural Studies の諸論考、Appadurai³⁾、Taussig⁴⁾をはじめとする近年の人類学におけるモノ研究の進展を考慮すれば、韓国社会におけるモノの研究もより注目されてしかるべきであろう。韓国社会がグローバリゼーションの流れの中にある 21 世紀の韓国社会を人類学的研究の対象にする場合に、冒頭で述べた澁澤らの視点とは異なる意味でモノ研究は重要となってくる⁵⁾。ただし澁澤らが言語もできない「異文化」であった朝鮮半島を見る際に具体的なモノに着目した態度には未だ学ぶべき点があるように思われる。現代韓国社会は従来の社会構造や文化体系のモデルで把握できないほど複雑化した。言説や表象やイデオロギーなどの観念的な側面だけでなく、具体的な事実＝モノから見るアプローチももっと行われてよいのではないだろうか。

注

- 1) ここで取りあげられている集落は 8 カ所、うち「移動部落波市」を除く 7 カ所の記述に「民具、服飾」が共通する。波市は漁場の場所に伴って移動する特殊な集落であり、直接訪問したのではなく、聞き書きによる。
- 2) 筆者の収集、分類による。これは鳴陸奥彦教授のプロジェクトによっておこなわれた。今後、日韓文化交流基金などにより、より包括的な韓国研究のリストが作成されると思われる。
- 3) Appadurai (eds.), 1986, *Social Life of Things*, Cambridge Univ. Press.
- 4) Taussig, 1980, *The Devil and Commodity Fetishism in South America*, Univ. of California Press.
- 5) 現在のグローバリゼーションの特徴がモノ、人、情報の移動が世界規模でおこっていることは事実である。モノ研究は必然的にグローバリゼーションの検討へと向かう。Appadurai (eds.), 2001, *Globalization*, Duke Univ. Press 参照。

한국 연구에 있어서 사물 연구와 생활재 조사

岡田 浩樹

1 처음——“조선 다도해 여행 비망록”에 있어 사물예의 시점

쇼와 11년(1936년 8월) 아키타 뮤지엄의 동인이 현재의 전라남도를 여행했다. 참가멤버는 澁澤敬三, 高橋文太郎, 桜田勝徳, 磯谷勇, 宮本馨太郎, 小川徹, 村上清文 등 아키타 뮤지엄의 중심적 인물들이었다. 현지 사정을 잘 알고 있다는 이유로 경성제국대학의 秋葉隆도 참가하고 있었다. 이 답사의 기록은 후에 “조선 다도해 여행 비망록”으로 출간되었다. 식민지 지배 하에서의 일본의 민속학자, 인류학자의 조선 반도에 있어서의 조사, 연구활동에 대해서는 최근에서야 연구가 시작되었고, 지금까지 자세한 검토한 이루어져 왔다고는 말하기 힘들다.

또, 일본의 태평양 전쟁 이전의 연구와 전후의 인류학, 민속학 사이의 연속성, 불연속성도 앞으로 검토해야 할 문제이다. 단, “조선 반도 다도해 여행 비망록”에는 전후 일본인 인류학자의 민속지에 없는 특징을 볼 수 있다.

그것은 스케치가 많다는 것이다. “조선 반도 다도해 여행 비망록”의 전반은 순행기인 조사 일지로 되어 있다. 38장의 사진과 그림 1장이 수록 되어 있다. 후반은 견문기로서 필드 노트의 비망록으로 되어 있다. 여기에는 21장의 스케치가 그림으로 수록되어 있다. 이 스케치의 대부분이 이른바 민예품과 가옥을 묘사한 것이다. 조선어를 말할 수 없는 상황에서 그것도 불과 3일간의 답사로 그토록 많은 분량의 필드 노트를 쓰게 할 수 있었다는 것 자체가 놀랍다. 단 역시, 말이 통하지 않는 조사에서는 통역을 쓰더라도 「관찰」과 그것에 기초한 기록이 주가 되었던 것은 충분히 이해 할 수 있는 일이다.

그러나, 이 특징에는, 단지 조사 기술상의 문제 뿐만이 아닌 문제도 포함되어 있는 것으로 생각된다. 즉, 일본의 민속학에 있어서 「민예품 연구」의 시점 혹은 사물에 대한 시점이 이 시기의 조사에 많은 영향을 주었다. “조선 다도해 연구 비망록”에서는 각각의 취락에 대해 대강의 항목을 만들고, 필드 데이터를 분류해 기술하고 있다. 그 항목의 예를 들면 다음과 같다.

「부락풍경」, 「민가」, 「민예품」, 「복식」, 「노동」, 「신앙」, 「잡(雜)」(전라남도 무안군 임자면 진리)

「부락풍경」, 「복식」, 「민예품」, 「조령제」, 「속신」(전라남도 무안군 임자면 수도리)

「부락」, 「복식, 민예품」, 「농업」, 「어업」, 「신앙」, 「잡」(전라남도 영광군 월면 상락월리)

취락별로 다른 항목은 있지만 「복식」, 「민예품」은 거의 모든 취락에 공통적인 항목이다¹⁾. 더 나아가 말하자면, 「노동」과 「신앙」의 항목에 있어서도 농기구와 어구, 의례용구 등의 사물에 관한 기술도 오늘날의 민속지와 비교하면 많다고 할 수 있을 것이다.

이러한 조선의 사물에 관한 커다란 관심은 식민지 시대의 일본인 연구자에게 공통적인 경향이라고 까지 말할 수 있을지도 모른다. 조선의 「속신(俗信)」에 관심을 둔 村山智順, 무속 연구에 집중한 秋葉隆, 赤松智城 등도 많은 사물의 사진, 스케치, 사물에 대한 기술과 논문을 남겼다. 이러한 생활 전반에 사물도 포함해 관심을 가지는 시점은 민속학, 인류학만이 아닌 今和次郎等 고현학(考現學)적인 접근과 넓게는 민예운동 등도 당시 조선의 사물에 대한 관심을 반영하고 있다고 말할 수 있을 것이다.

그들의 연구는 물론 현재 민족지적 연구의 수준에서 보면 불충분한 점도 있고 식민주의적 차별이 들어가 있음은 자주 지적되는 사실이다. 조선(한국)의 사물에 대한 관심은 이국적인 문물예의의 관심이며, 어떤 부분은 오리엔탈리즘과도 친화성이 있는 것은 사실이다. 그렇지만, 당시의 연구자가 가지고 있던 조선(한국)의 사물에 대한 시점은 물질 문화(사물)도 포함한 생활 전반의 이해라는 시점의 맹아였을 가능성도 있다. 전후의 인류학적 연구 전개에 있어 이 시점은 어떻게 되어 갔을까. 그리고 오늘날 그들의 사물에 대한 시점에서 배울 만한 점은 없는 것인가.

2 전후의 한국연구에 있어서 「사물」에의 관심의 약화

단적으로 말하자면, 전후 일본에 있어서 한국 사회에 관한 인류학적 연구는 오히려 사물에 관한 관심을 잃었다고 할 수 있을지도 모른다. 예를 들어, 일본에서 발표된 전후부터 1990년까지의 인류학적(민속학을 포함) 연구의 논문 628건 중 물질 문화 그 자체를 주제로 한 논문은 불과 18건에 그친다²⁾.

전체 연구 경향으로써 전후의 인류학적 연구는 오로지 가족, 친족관계를 중심으로 사회 구조의 이해에 집중해 왔다. 한편으로 민속학은 샤머니즘을 중심으로 한 민간 신앙 그리고 한국의 기층 문화, 한국인의 심성에 관심을 쏟아 왔다고 말할 수 있을 것이다. 이 결과로 한국사회의 인류학적 접근으로써 물질 문화 연구(사물 연구의 시점)가 전전(戰前)과 비교하면 적은 것처럼 보인다.

이 배경에는 물질적 문화를 중심으로 다루는 여러 분야의 존재가 있기 때문이기도 하다. 예를들어 今和次郎의 민가 연구는 전후에 오로지 건축학의 분야에서 진전했다. 또는 의복에 관해서도 피복학의 분야에서 한국의 의복에 관한 연구를 담당하고 있다. 한국의 민예품 연구는 민예 운동의 흐름이 연구자와는 다른 입장에서 민예품 애호가들에 이어져 내려오고 있다. 어떤 의미에서 연구 분야의

분업화, 세분화의 결과, 인류학, 민속학이 한국의 물질 문화(사물)을 다루지 않게 되었다는 견해도 있을 수 있을 것이다.

그러나 최근 이러한 비판이 있다고는 하지만, 인류학에 있어서 전체적 접근의 관점에서 볼 경우, 다른 사회의 연구와 비교해도 한국연구에 있어서 물질 문화(사물) 연구가 적다는 것은 지적할 수 있을 것이다. 사회 관계, 집단을 규제하는 규범, 사회 구조에 관심을 집중시킨 경우, 어떻게 해서든 구체적인 사물 자체보다도 사회적, 문화적 기능, 의미가 중시되어진다. 전전(戰前)의 연구에 있어서도 분류와 지역성, 다른 사회와의 비교에 주요한 관심이 있고 물질문화와 사회와의 관계, 생활속에서의 사물과 인간과의 관계는 등한시 되어 왔다.

물질 문화(사물)에 대한 관심이 약화된 것이 한국사회의 인류학적 연구에 어떠한 문제를 초래했는가에 대해서는 신중하게 검토해야 할 문제이지만, 여기서는 이하의 특징을 지적할 수 있을 것이다. 먼저 민족지적 기술에 있어서 사물은 어디까지나 사회관계 의례등의 문맥에서 설명되는 경향이 있다. 게다가 사물이 중요한 위치를 차지하는 생활이 아닌, 친족제도, 의례, 사회 관계 등 전체적인 문화(사회)의 문맥에서 설명되는 경향이 있다. 이 배경에 사회적 기능, 상징, 표상에의 주목등, 사회(문화)가 일방향적으로 사물을 의미짓는 암묵의 합의가 연구자 사이에 있었다고 말할 수 있을 것이다. 지나치게 말하는 것일 수도 있으나, 한국의 사회 문화에 접근할 경우 물질문화에 대해 정신성, 관념성이 우위에 있다는 전제가 있는 것처럼 말이다.

이러한 특징은 결코 전면 부정해야 될 것은 아닌 것이 당연하다. 그러나 물질 문화(사물)에 착목함으로써 얻을 수 있는 흥미깊은 문제를 지금까지 놓쳐 왔던 것이 아닌가라고 생각된다. 사물 그 자체가 산출하는 의미, 현상에의 주목, 사물 끼리의 관계가 산출하는 관계가 결여되어 있다.

전체적으로 보아 전후에서 1990년대까지의 인류학적연구에 있어서는 한국사회와 문화를 살피려는 시도가 행해져 왔다. 이것은 「전통적 한국사회」의 이해에는 일정의 성과를 거뒀다고 평가할 수 있을 것이다. 그러나 전후의 한국사회는 사회, 문화 나아가서는 라이프 스타일을 포함하는 생활전반이 커다란 변화를 겪어 왔다. 그런 까닭으로 필드 워크를 할 경우의 방법론상의 문제가 충분히 논의 되어 왔다고는 말하기는 어렵다. 그래서 사물(물질문화)에의 관심이 약화되었기 때문에 그들이 파악한 사회, 문화의 전통적 모델과 필드워크에서 발견하는 현실생활과 그 변화 사이에 있는 어떤 종류의 과열이 생겨나고 있었던 가능성도 있다. 즉, 구체적인 사물이 그 중요한 일부로써 구성되는 현실의 생활은 이 시기 큰 변화때문에 곧바로 사회적 기능, 의미, 표상에 환원할 수 없다.

1990년대 이후, 한국사회는 또 커다란 변모를 겪고 있다. 고도성장기가 어느정도의 단계에 달하고 산업화 도시화에 의해 한국인의 라이프 스타일이 「이선생 가족」과

같은 도시 생활자 (집합 주택을 비롯하여) 로 이행하고, 또 최근에는 인터넷, 휴대폰 등 커뮤니케이션의 영역에 있어서 변화가 크다. 이른바 한국사회가 완전하게 「전통사회」에서 고도 소비사회에 이행하고 있고 한국인의 라이프스타일도 커다란 변화를 하고 있다. 그 잠정적인 시기 구분으로써 일단 1990 년을 설정할 수 있지 않을까.

1990 년대 이후의 한국 연구의 특징은 급격하게 그 수가 증가한 것 뿐만 아니라, 분야를 초월한 연구가 많아지고, 특정분야와 관련짓기 어려운 것도 있다. 그러나, 인류학적 연구에 한정해 보면, 1990 년대까지의 경향은 현재에 이르기까지 계속되고 있는 것이 아닐까 라는 가설이 성립된다.

3 한국사회와 인류학적 접근, 「사물」 연구

한국 사회의 특질로서 사물과 생활에 대한 관심이 희박한 것이 자주 지적되는 것은 사실이다. 살기 익숙한 가옥에서 도시의 맨션으로 향해, 어떠한 망설임도 없이 이동하고, 또 빈번하게 그 맨션에서도 이사를 되풀이 하는 점, 일본의 촌락과 비교하여 한국의 촌락에는 보존 유지되어 있는 문서와 사물이 압도적으로 적은 점, 신제품에 대한 한국인의 높은 관심, 등 여러가지 에피소드들이 이야기 된다. 동시에 한국사회의 에토스로써 물질에 대한 정신성의 우위가 강조된다고 하는 견해도 있다.

그러나, 물질 문화에의 관심의 희박함이 한국 사회의 에토스인지는 신중하게 검토해야 할 문제이다. 연구자측의 방법론, 인식론적 문제도 고려할 필요가 있을 것이다. 한국 연구문제에 그치는 것만이 아닌, 문화의 이해를 둘러싼 인류학적 접근의 문제점이 내포되고 있을 가능성도 부정하기 힘들다. 이것은 다른 곳에서 다시 논해야 할 중대한 문제이기 때문에 여기서는 이하의 2 가지 사항을 지적하는 것으로 정리해 보겠다.

첫번째로, 한국연구에 있어서 「문화」가 자명시 되고 문화개념이 내포하는 함의와 문제점이 논의되지 않아 왔다는 점이다.

근대의 인류학적 연구의 인류학적 시점에 있어서 문화의 관념적 측면 및 관습으로의 집중은 물질 문화 연구의 시점의 약화와 표리 일체의 관계에 있다. 일반적으로 「문화」란, 그것을 가장 넓게 정의하면 인간행위 (및 그 소산) 의 축적 전체 중, 유전적인 것이 아니라 사회적으로 전달되는 부분을 가르킨다고 정의된다. 이러한 문화의 정의의 원천은 타일러의 「원시 문화」의 정의를 수정한 것이다. 예전의 문화 연구에 있어서 중심 개념은 「관습」, 즉 전통적, 규칙적으로 행해지는 세상사의 행위에 대한 개념이었다. 각각의 문화의 특징을 언급할때, 어디까지나 관습 즉 그 배후에 있는 「사회관계」, 「구조」, 「체계」 등의 관념적 측면과 모델이 강조되어 왔다고 말할 수 있겠다.

구미의 인류학을 「수입」해 온 일본의 인류학자들은, 그 결과 물질 문화 연구를 간과해 왔다. 또 하나의 단위로써 한국문화, 사회에 관한 전체론적 접근은 「민족」의 문제와 연동하면서 강화되고, 결과적으로 사물(물질)이 직접 관련하는 「생활」의 문제를 논의해 온 적이 없는 경향이 있다.

두번째는 특히 물질 문화를 다루는 경우의 개별문화, 이 경우는 「한국문화」라고 하는 복합 개념이 내포하는 함의와 문제점을 논의해 오지 않았더라는 점이다.

사물(물질 문화)을 다루는 경우, 「한국의···」라는 접근 방식이 있다. 이것은 먼저 하나의 통일성을 가지는 한국 문화를 전제로 하고 그 특성을 다른 것과 비교하는 방법이다. 그러나, 거기에는 개별의 「하나의 문화(a culture)」와 보편적인 「문화(culture)」라고 하는 이중의 기준이 있다. 이 결과로써, 사물은 그 구체적인 문맥을 고려하는 것처럼 보이지만, 그 특성을 지적할때에는 보편적인 기준에 의해 동일시된다. 예를 들면 문화 항목(culture items)의 시점이 있지만, 거기에 있어 식문화, 주문화라는 대상화는 아주 애매모호하다.

그리고 인류의 한 속성으로써 문화 일반과 일반적으로 특정인간 집단에 독특한 생활양식으로 생각되는 개별 문화(a culture)는 구별될 필요가 있다. 후자는 문화로의 특성론적 접근 방식이라고는 하지만 거기에는 「문화 영역(culture area)」이라는 선입관이 내포되어 있다. 이러한 문화영역의 접근은 문화의 여러 특성에 고도의 일관성(문화체계)이 보이고 그것도 근접영역과의 차이가 확실히 인정될 수 있을 만한 지리적 영역을 구획하고자 하는 시도에 연결된다.

한국사회와 같은 민족적으로 균질한 「단일 민족국가」를 다룰 경우 이 두가지 문화의 구분은 좀더 보기 어렵고, 개별의 사물에 과도하게 고도의 일관성을 보거나, 혹은 일관성에 적합하지 않은 경우 그 물건을 배제해 버릴 위험성이 있다.

이 접근 방식의 문제점은 현대 사회를 다룰 경우 나타난다. 표준화된 대량소비재가 생활재의 대부분을 차지하는 상황에 있어서 이제는 한국적인 것은 한국인의 생활에 적어지고 있다. 대량소비재를 통해 한국 사회의 특성, 고도의 일관성을 보는 것은 불가능하다.

4 맺음말——「이선생 일가」 전시가 제기한 문제와 사물 연구의 가능성

필자는 산업화, 도시화 나아가서는 세계화라는 상황에 접하여 가족, 친족 연구를 중심으로 한 사회구조 연구와 사머니즘 연구에 초점을 맞추어 「한국의 기층문화」를 해명하고자 하는 「전통적인」 수법에는 더 이상 별 유효성이 없다고 생각하고 있다. 그러나 인류학적 연구가 「전통사회」의 해명을 향하고, 역사학의 한분야로써 존속하지 않을 수는 없다고는 생각하지 않는다. 국립민족박물관의 특별 전시는 현재

한국 사회에 대한 인류학적 연구의 가능성을 제시하고 있다고 볼 수 있다. 3000 점에 달하는 많은 사물을 현실의 한국 가족이 소유하고 있었다는 점을 사실로써 출발해야 할 것이다. 이러한 사물들에 둘러싸인 한국의 가족 (chip) 의 모습은 기존의 한국 가족 (chip) 연구에서는 그려진 적이 없는 것이다.

이 사실에서 출발할 때에, 여러가지 문제를 설정할 수 있다. 예를 들면, 전시되어 있었던 다량의 대량 소비재와 개별 가족 관계에 있어서의 「불균형적인」 관계는, 예를 들면, 상품, 상품화, 차이화, 몰상화와 구체적인 사물 (현상) 의 관계를 어떻게 생각할 것인가의 문제를 제기한다. 또 개개의 사물의 에피소드 (개인사, 역사, 일화) 를 이야기 하는 것의 유효성과 그것들 사물에서 사회와 문화 전체를 파악할 수 있을 것인가 하는 문제도 있다. 그 배후에는 앞 절에서 지적한 것 같은 일반적인 문제도 놓여져 있다. 사물을 파악하기 위해 어떠한 개념 장치, 방법론, 인식론이 필요한 것인가하는 문제이다.

지금까지 일본의 인류학자의 반응은 흥미로워하면서도 조금 냉담한 듯한 태도의 인상을 받는다. 그것은 예전 고현학 (考現學) 등의 수법이 사회의 한 단면을 지적하는 것에 그치고 마는 「재미 있는」 연구 이상의 평가를 받지 못한 것과 공통되는 것으로, 「생활 실태조사」 라는 방법도 지금까지 개별 문제 의식에 그치고 마는 한계가 있기 때문일 것이다.

그러나 최근의 문화연구 (Cultural Studies) 의 여러 논고들과 아파두라이 (Appadurai)³⁾, Taussig⁴⁾ 등 최근 인류학에 있어서 사물 연구의 진전을 고려한다면, 한국 사회에 대한 사물 연구도 보다 주목 받아 마땅할 것이다.

세계화 흐름 속에 있는 20 세기의 한국 사회를 인류학적 연구 대상으로 할 경우, 서두에서 밝힌 아티크 뮤지엄 동인의 시점과는 다른 의미로써 사물 연구는 중요하다⁵⁾. 단지 아티크 뮤지엄 동인이 언어도 할 수 없는 「이문화」였던 조선 반도를 볼 때, 구체적인 사물에 착목한 태도에는 배워야 할 점이 있다고 생각한다. 현대 한국 사회는 종래 사회구조와 문화 체계모델로 파악할 수 없을 만큼 복잡해졌다. 담론과 표상과 이데올로기 등의 관념적 측면만이 아닌 구체적 사실——사물에서 부터 본 접근 방식——도 좀 더 연구되어져도 좋은 것이 아닐까?

주

- 1) 여기서 거론되는 집락(集落) 8 곳, 그 중 이동부락 과시 를 제외한 7 곳의 기술에 민예품, 복식이 공통적이다. 과시는 여장에 따라 이동하는 특수한 집락이며, 직접 방문한 것이 아니라, 듣고 적은 기록에 의한 것이다.
- 2) 필자의 수집, 분류에 따른다. 이것은 嶋陸典彦교수의 프로젝트에 의해 행해졌다. 앞으로 한국교류기금등에 의해 좀 더 포괄적인 한국연구 리스트가 작성될 것으로 생각한다.
- 3) Appadurai (eds.), 1986, *Social Life of Things*, Cambridge Univ. Press.
- 4) Taussig, 1980, *The Devil and Commodity Fetishism in South America*, Univ. of California Press.
- 5) 현재 세계화의 특징이 사물, 사람, 정보의 이동이 세계 규모로 일어나고 있는 것은 사실이다. 사물 연구는 필연적으로 세계화의 검토로 향할 것이다.
Appadurai(eds.), 2001, *Globalization*, Duke Univ. Press 참조.

